



未来への教科書

~For Our Children~

出前授業



主催 :  復興支援メディア隊
(事務局: 合同会社アースボイスプロジェクト)

後援 :  MITSUI & CO.

企画協力 : **BS12 トゥエルビ**

 復興支援メディア隊
Media Team

きずな

	共存共榮 堀 有伸さん	(ほりメンタルクリニック院長 福島NPO法人みんなのとなり組理事長・精神科医【福島県】)	2
	人を助ける 長純一さん	(石巻市立病院開成医療所所長 包括ケアセンター所長・内科医)【宮城県】	10
	地域との繋がり 及川 武宏さん	(株式会社スリービース 代表取締役)【岩手県】	4
	地域との繫がり 佐藤 桢平さん	(株式会社ココロマチ ココロココ営業部)【東京都】	2

ものづくり

	モノをつくる 渡邊 さやかさん	(一般社団法人 re:terra(リテラ)代表)【岩手県】	27
	復興とは? 本田 勝之助さん	(本田屋本店有限会社 代表取締役)【福島県】	26
	復興とは? 岩佐 大輝さん	(株式会社G.R.A 代表取締役)【宮城県】	20
	自然との共生 富山 信さん	(NPO法人森は海の恋人副理事長)【宮城県】	18
	伝統文化を生かす・守る 長谷川 純一さん・清水 琢さん	(人と種を繋ぐ会津伝統野菜)【福島県】	16
	自然との共生 八木 健一郎さん	(株式会社三陸とれたて市場 代表取締役)【岩手県】	14
	食を守る 阿部 隆昭さん	(株式会社グランバーム 株式会社グランバシシステムエンジニアリング 会長)【神奈川県】	12
	食を守る 高橋 博之さん	(NPO法人東北開墾 代表理事)【岩手県】	10

三井物産の東日本大震災復興支援に関する2020年までの取組方針

自由帳・ワークシート

27

26

24

22

20

18

16

14

12

10

8

6

4

2

「未来への教科書～For Our Children～」は、震災直後から被災地の今、課題、未来をテーマに制作していくテレビ番組で、BS12ch Twell-TVで放送しました。

今回の出前授業は、これまでに番組に登場していただいた人の中から、本企画にご賛同頂いた11人と1組の取り組みを「教科書」にし、登場人物と、実際に取材に当たった復興支援メディア隊のメンバーと一緒に、中学校、高等学校を訪問し、1日先生として「生きるを育む」をテーマに授業をします。

出前授業は対象地域の中学校、高等学校から受講希望を募り、選考した学校に対して実施します。

私たちは子どもたちに大震災、そして今を生きる1日先生と生徒が直接対面することでのら考え行動する「生きる」力を育む一助となればと考えています。

復興支援メディア隊 代表 榎田竜路

震災以前のこと

東京にある大学病院の病棟で勤務をしていました。地震が起きた時も病院にいましたが、長く強く揺れたので驚きました。

震災から現在

病院には被害はありませんでしたが、東京で過ごしながらニュースなどを通して次々と入ってくる情報を、とんでもない事が起きてしまったという、気持ちの整理がつかない状況で見ていました。

その後、環境問題に取り組んでいた親友が、原発事故に強い衝撃を受け、福島県を支援するために相当熱心に活動するようになり、彼に誘われるような形で福島に足を運ぶようになりました。11月頃でしたから、震災直後から動かされた人たちから比べると、随分ゆっくりなスタートでした。

直接的な被災地の被害も大きいですけれど、私はどうしても人の心とか目に見えない部分がどういう仕組みでどういう風に動いているかという所をとても気にする人間なんです。原発事故とそれに関係する様々な状況を目の当たりにして、こういうのを繰り返すうちに日本は大変なことになると危機感を持ちました。東京で暮らしていくもその不安は解消されないだろう。幸い医師免許を持っていたので現地に飛び込んでも受け入れてくれる場所があると感じたので、新しい勤務先を決め、平成24年の4月に南相馬に引っ越しました。この地域の精神科というのは、よほど重症にならないと患者さんは病院に来ないんです。なので、一見元気そうに見える人でも放置すると深刻なことが起きるリスクを抱えている。そこにアプローチしたい思いがありました。

私が勤務を始めた4月の中旬から旧警戒区域への住民の一時立ち入りが許可されるようになりました。20キロ圏内といわれている所

福島NPO法人みんなのとなり組理事長・精神科医
【福島県】

ほりメンタルクリニック院長

地域のお手伝いを

心理学の立場から

きずな
共存

心理学の立場から 地域のお手伝いを

福島NPO法人みんなのとなり組理事長・精神科医

【福島県】



堀有伸さん

精神科医の堀さんは、南相馬で様々な予防医学的な取り組みを試みている。ラジオ体操や心をケアするワークショップ、一年は医療、福祉に携わる人を中心NPO法人みんなのとなり組を立ち上げ、理事長として活動をしている。被災した人やそれを支援する人の精神的な負担、ケアする取り組みを語っています。

中高校生へのメッセージ

広く心を開いて色々な人に影響を受ける、あるいは周りの話題になっていることに取り組むことも大事ですが、自分をしっかりと持って、何と言われても頑固に本当に自分の好きなこと、やりたいこと、欲しいものを追求することも大切です。他の人にとって地味でも、自分にとって大切なことは大事にしてほしいですね。

将来のビジョン

私が一人で出来るのは精神医療に関する抽象的な所もある特殊技術や知識、テクニックなので、正直理解してくれる人は少ないので、分かってくれる人が少しづつ増えていく事で環境は変わっていくと思っています。他にも多くの人のご理解とご協力を得ながら、広く運動を通じて健康への意識を高め、人と人の繋がりを強めるようなラジオ体操やウォーキング教室などの活動を行っています。それらと認知療法をはじめとした精神医学の技法が結び付いてくると良いなと思っています。

この地のこころの問題に取り組み、うつ病や自殺の予防に取り組むのが私たちのミッションです。個人が悩みを抱えたままで孤立しないよう、昔の「隣組」が持っていたような人と人の結び付きを再生させようと活動しています。健康講座や交流会を開いたり、ラジオ体操を続けたりしています。

私の本職が精神科医で、精神病理学や認知療法のような心理学の立場からこの地域にお手伝いしたいというのが基本的なスタンスです。本当に複雑な問題が起きていて、ゴチャゴチャになつたまま整理されていない。それを一つ一つほぐしていくという作業が私の出来ることだと思っています。

震災以前のこと

東京で生まれ、関西で育ちました。信州大学を卒業し、長野県の佐久総合病院に所属し、中山間地域の診療所で、地域包括ケアに取り組むとともに、医療系の学生や研修医の受け入れに非常に力を入れていました。もともと、農村部やへき地で医療に携わり、社会に貢献したいという強い思いを持っていましたから、多職種連携や医療・保健・福祉で地域をどのようにして守るか、といったことにも取り組んでいました。

震災から現在

地震が起きたときは、限界集落といわれる山間地域で訪問診療の最中でした。診療所に戻り、地震の詳細を知りました。

ゴールデンウイークに、長野県の医療チームの一員として5日ほどの日程で石巻に入りました。これは石巻を選んだのではなく、派遣された先が石巻でした。今思うと、石巻とのご縁はここから始まりました。佐久に戻り、実行委員長を務めていた在宅ケアの全国大会を9月に終え、阪神淡路大震災で数年にわたって継続的に関わった経験や、佐久病院での取り組みで得た経験を被災地支援に生かしたいという思いから、石巻市立病院に相談し、巨大な開成・南境の仮設住宅に開成仮診療所を開設していました。2012年5月のことです。

被災して劣悪な環境にいる人たちを、医療へのアクセスが容易な場所で集中的に支援すること、そして、診療所が近接していくも精神的なダメージや貧困から医療につながらなくなってしまう多くの人がいるので、行政の被災者支援と連携しながら、保健活動や生活支援を行っていくことが重要だと考えていました。

目の前の災害の状況は本当に悲惨でした。しかし、これまでの経験から、医療の問題というよりは、むしろ、保健や福祉の観点から見たり、

被災地支援に 人生をかける

さずな

人を
助ける

長純一さん

石巻市立病院開成仮診療所所長
包括ケアセンター所長・内科医

【宮城県】



長純一さん

震災後、復興公営住宅の建設が進み、仮設住宅からの転居が進む中、長さんは住民たちの中に震災前には「ご近所さん」のような関係を構築し、住民同士のコミュニケーションが取れる新生活こそが必要だと考え、取り組みを始めた。復興とともに変わっていく地域のコミュニティ。医師の立場から見た、人や地域のつながりの大切さを語つていただく。

中高校生へのメッセージ

保健・医療・福祉の領域の仕事は、地方の被災した地域で最も必要とされる仕事です。大変な仕事だけれど、その分、やりがいもある。将来の職業の選択肢のひとつに、考えてみてください。

将来のビジョン

9月に再建された市立病院は、総合診療・地域医療が柱となり、その育成に力を入れることになっており、実際若い医師が集まっています。当初よりの大きな目的でしたが、地域医療を目指す若い医師・医療者の育成に力を入れていく予定です。

「復興」はいつか终わります。それまでに、自治体と医療・福祉関係者、コミュニティの力で支える仕組みづくりをしないといけない。これは被災地だけでなく、日本が必要とする取り組みだと考えています。また、熊本地震でも、被災地での復興と地域包括ケア構築のため少しでもお役に立てばと足を運び、被災地の医療関係者と連携して支援を続けています。この活動はこれからも続けていきます。

支え合う力やコミュニティを創出したことが、石巻全体の健康問題の改善につながると考えたのです。また、石巻で在宅医療や保健活動のノウハウを持つた医療者を育成すれば、他の地域やへき地、被災地などに送り出していくことも可能だと考えました。

身近な命の問題を大事にした復興になるよう、心に寄り添い生活支援をする仕組みを作らなきやいけないとの強い思いで活動を続けました。2013年、保健・医療・福祉の連携と、支え合う地域づくりと一緒に考える地域包括ケアが重要な政策となりましたが、実際の被災地の現状は、まだまだ厳しいものがあります。

仮設に暮らす人たちの健康状態の悪化や、コミュニティの再生など、まだまだ深刻な状況は続いているのです。表には出さないけれども、心に傷を負っている人も多く、少しでもそれを和らげようと活動を続けています。現在の診療所も当面は継続されますが、その後のことは詳細に決まってはいません。

自分で育てたブドウで 大船渡のワインをつくる

株式会社スリーピークス 代表取締役

及川 武宏 さん

【岩手県】

震災以前のこと

私は大船渡の生まれですが、震災当時は東京のコンサルティング会社で企業関係のコンサルタントをしていました。職場は新宿の高層ビル群の中にあるオフィス。辞めてバツクパツカーズという格安のゲストハウスを作ろうと考えていた矢先に地震が起きました。

震災から現在

当日は新宿のオフィスにいました。14階でしたのでかなり揺れました。徒歩とタクシーでやつとのことで埼玉の自宅に帰りました。古里の大船渡が大変な事になっているのはニュースで分かっていました。実家の両親と連絡が取れたのは2日後の夜、東北にいる2人の弟も幸い無事でした。

5月に会社を辞めるまでは被災地に物資を運ぶなど、個人で支援活動を続けました。その後、東日本大震災復興支援財団に入り、最初に高校生向けの奨学金事業を作りました。震災が起きる前の環境は当然無くなりましたが、その環境によって自分がやりたいことが出来なくなる高校生が多くなると思ったんです。両親が働く環境がなくなつて自分もバイトをしなきゃいけない、その為に学校に行くことが出来ない。そういう子どもを一人でも無くそようと、高校生が夢を諦めなくていいように、返済はいらぬ給付型の奨学金を作りました。

実は震災が起きる数年前からバツクパツカーズとともに、地元でのワイナリーの構想も温めていました。財団の事業をやりながら地元にできることをやろうと、大船渡に戻る決心をしました。地域に外国人を呼びたいと思っていたんですね。僕もそうでしたが、大船渡の子どもたちは外の世界を知らない。幼い時から色んな視野を広げてもらいたい。

たい。だつたらそういう環境を作つてあげようと。元々は東京にバツクパツカーズを作つてそこをハブとして東北に外国人を連れてきたい、と考えていたんですが、大船渡でワインの生産からワイナリーを軸とした観光ビジネスまで出来ないかと、考えたわけです。

ワイナリーをやりたいと考えた根底には、ワーキングホリデーで訪れたニュージーランドで、ブドウ園で働いた経験もありました。小さなワイナリーが点在するその町には、海外から大勢の観光客がやってきました。その町と大船渡つて似てるんですよ。

2013年5月、スリーピークスワイナリーを立ち上げました。ブドウは植えてから収穫できるまで3年ほど掛かるので、他の農園から買い付けた果実で岩手県内の醸造会社でつくったワインを売っています。陸前高田市にあるリンゴ園も引き継ぎました。リンゴ園の木は老木が多く、手間はかかるんですが、美味しいリンゴがなるんです。

財団の仕事も継続していて、宮城のジュニアアスリート育成事業つ

ていうスポーツを通して人材を育成する事業もやっています。

将来のビジョン

まずワインに関しては大船渡市内にワイナリーを作つて、自分で育てたブドウで大船渡のワインを作りたいというのがここ数年の目標。次に、子どものために交流人口を増やしながら三陸リアス海岸エリアにワインバーを作りたい。大船渡市つてスペインの小さな町と姉妹都市なんです。さらにリアス海岸もスペインが発祥なので、漠然ですが、その繋がりも生かして、世界の文化も受け入れて融合したものを作れないかなというビジョンもあります。

及川 武宏 さん

及川さんは震災後に東日本大震災復興支援財団に所属後、地元である大船渡市に戻った。三陸を思い出す美味しいワインを作りたいという思いから、ブドウ畑を始めた。リンゴ畠も譲り受け、シードルの開発も進めている。将来はワイナリーを通じこの地に多くの外国人が訪れる。子どもたちが刺激し合える場所になつて欲しいと願う及川さんに地域と農業の繋がりについて語ついていただく。



中高校生へのメッセージ

過去のこととかあんまり考えずに未来をしっかり見て欲しい。今、自分が何をやりたいかを常に問いつけて、やりたいことを必死にやって欲しい。今、本当に何が出来るとか、何がしたいか、自分の好きなことを好きなだけやってほしいなと思います。



地域との
繋がり

きずな

地域を元気に！

震災以前のこと

株式会社ココロマチ
ココロココ 営業部
佐藤 梓平さん
【東京都】

岩手県一関市で生まれ、野球や駅伝、応援団などの活動をしながら高校まで地元で育ちました。明治大学に進学し、地域づくりや農山漁村政策などを学ぶと同時に、三木武夫元首相など、政財界に多くの人物を輩出してきた明大最古の「雄弁部」で活動していました。

震災から現在

震災のあつた3月は大学1年生が終わろうとしている時で、岩手に帰省して、岩手県議会議員（現：「東北食べる通信」編集長）の高橋博之さんの事務所で、インターネットをしていました。事務作業をしていた時に地震が起き、非常に長く揺れが続きました。地震の状況は把握できていま、事務所内に散乱したものの片付けをし、夜になって津波の被害のことを知りました。

翌日、実家に戻って片付けを手伝いました。実家は内陸部ですが、山を一つ越えた陸前高田が甚大な被害を受けていることを知り、支援活動に動くことができる地元の知人や友人とボランティア活動を始めました。活動の柱は、遠方から届く物資を個人宅やみなしの避難所へ運ぶ支援、県外から支援に来る人のアテンド、復興支援関連のネットワークづくりの3本。4月中頃まで地元で活動を続け、東京に戻つてからは、被災県出身の学生を中心とした地域支援の学生団体「ARCH」を立ち上げ、活動の幅を広げました。



佐藤 梓平さん

岩手県一関市出身の佐藤梓平さん。東京の大学に進学した最初の春休みに震災が起った。大学生活と並行して物資支援を始め、様々な支援活動を続ける中で、「復興」の次のフェーズに向け「ふるさとづくり」をテーマに打ち出し、活動を続けています。地域の本当の素晴らしさとは何か、をテーマに語っています。

中高校生へのメッセージ
「井の中の蛙にならぬべからず」という言葉を贈ります。広い世界を見るために、まずは自分がしっかりと動き、アンテナを高くすること。そのことがあなたにも、そして地元にも必要です。そういう感性を持って磨いてください。

将来のビジョン

今は仕事と暮らしの拠点が東京になっていますが、将来的には拠点を岩手に移す予定です。そこで、新しい働き方やライフスタイルを実践していくことを楽しみにしています。

そして、岩手（特に地元の一関市）を面白い地域にして、ふるさとに戻つたり関わつてくれたりする仲間を増やすために、ビジネス、政治行政の様々な面からアプローチを続けたいと思います。

今は仕事と暮らしの拠点が東京になっていますが、将来的には拠点を岩手に移す予定です。そこで、新しい働き方やライフスタイルを実践していくことを楽しみにしています。

そして、岩手（特に地元の一関市）を面白い地域にして、ふるさとに戻つたり関わつてくれたりする仲間を増やすために、ビジネス、政治行政の様々な面からアプローチを続けたいと思います。

豊かさとは なんだろう

一般社団法人 re:tterra(リテラ) 代表

渡邊 サヤカさん

【岩手県】

ものづくり
モノをつくる



渡邊さやかさん

渡邊さんは大手企業でコンサルティングをしていた。震災を機に陸前高田に縁が生まれ、地域ブランドを作りたいと思いつき、気仙椿を使ったハンドクリームの製造販売にこぎ着けた。他の女性たちとの幅広いネットワークを持つバイタリティ溢れる渡邊さんにその思いや取り組みを語っていただく。

中高校生へのメッセージ

自分は何がしたいかとか、何をしている時が楽しいかを知ることが大切じゃないかな。あとは勉強も大事だけど、よく遊ぶことかなと思っています。大人になって思い出るのは勉強の事じゃなくって、あの時みんな風に悩んでいたとかいう経験。自分にとって何か楽しいか、興味があるのかを考えつつ、沢山遊んでください。

将来のビジョン

被災地といわれる場所や途上国といわれる場所には、これから社会の在り方のヒントがあるんじゃないかと思っています。都市と地方、あるいは大企業と地域企業は、それぞれのスピード感、それの違った力を持っている。そして、それぞれ互いの価値観や持っているものを提供したり、学び合ったりできると思うんです。私はその橋渡し役としてビジネスを成功させてモデルを作りたい。さらにもう少しアカデミックの力も付けたいと思っています。

ですが、地元では一部の実を拾つて食用油にしているだけで、椿の実のほとんどは使われていませんでした。そこで、この種を使って化粧品にすることでの付加価値をつけ、新たな産業に出来ないかと考えました。しかし、現地の方々と事業構築をしていくことは容易ではありませんでした。それでも、地域を元気にしていくためには、経済・産業が必要だという強い信念で粘り強く説得を続けました。商品開発や製造には東北支援に取り組む女性医師の会や化粧品メーカーが協力してくれたり、2012年11月に気仙椿ハンドクリームの商品発表をすることが出来ました。一方、カンボジアの女性が美容技術を身につける場を作ろうという活動にも取り組んでいます。カンボジアでネイルサロンを経営している女性起業家との出会いがきっかけです。カンボジア国内では美容について質の高い技術を教える場がないため、日本から専門の技術者を派遣してサポートしていく、将来は技術を学べる学校を作りたいと考えています。実は私は11歳の時に初めての海外としてネパールを訪れていました。そこで目にしたのは日本では知ることのなかつた世界でした。子どもながらに感じた「豊かさとは何だろう」ということをその後も常に考えようになりました。その時に感じたことが、今の私を作っているんですね。経験って本当に大切だと思います。

震災から現在

大学、大学院と国際協力を学び、コンサルティング会社に入社しました。3年ぐらいで辞めますと言つて会社に入っていたので、4年が経過し、コンサルティング業務以外に、社内での様々な社会的な活動もやらせてもらつたので、そろそろ次のキャリアを考えようかな、というタイミングで震災が起きました。

震災以前のこと

震災当日は、都内で米国NPO法人のイベント実施の予定でした。大きな揺れがあつて、イベント会場の近くのテレビで地震の様子が映つているのを見て、これはイベントをやっている場合じゃないと思つて、関係者と連絡を取り合つてイベント自体は中止になりました。

その日の夜から、当日イベントを実施する予定だった米国NPO法人の中で、そのNPOで扱つてている商品は、今の被災地でも求められるものだということで、寄付を集める動きが始まつたのです。そのNPOで扱つていたのは、例えばソーラーランタンとかストロー型の簡易浄水器具だつたりしたのですが、そうした安価で社会課題を解決出来るような商品は、途上国だけでなく、被災地でも必要とされるものだよねということになつたのです。

次の日から、寄付を集める活動が始まつたのですが、その一方で、まずはどこの地域で電気やガスが止まつているか、何に困つていてどんなものを必要としているかとこうなことを調査をする担当になつたのです。震災後に最初に東北に入ったのは友人がいた福島。その後現地に足を運ぶうちに、被災地の状況は開発途上国に似ているところもあることに気が付きました。なので、緊急支援のフェーズの後は産業支援が必要になるな、と考えました。これまでの自分の経験が生かせるんじやないかとも思いました。

今の自分の原点を 忘れずに

ものづくり

本田屋本店有限会社 代表取締役

本田 勝之助さん

【福島県】

復興とは?

震災以前のこと

うちは代々青果問屋だったので、家業を継ぐような思いで、農業者のブランディングやその販路開拓など、食のプロデュースの事業を主に取り組んでいます。今年でおおよそ10年目になります。

震災から現在

大震災の揺れがあった時には、会津若松にある会津木綿の工場にいました。物凄く揺れはしましたけれど、その後も仕事をこなして会社に戻つたら、棚が全部倒れていて、社員は誰もいなかつたんです。「何かひどいことが起きたんだ」と思つて実家に行つたら、家族の顔つきが全く違つていました。そこにあつたテレビを見て、事態がようやく分かりました。これまで、一緒に食のブランド化などに取り組んでいたお客様が住む町が、まさに津波に飲まれている。とにかくその人たちのことが気がかりで仕方ありませんでした。

原発の事故が起きた時は、放射性物質自体がどのくらいの強さで、どこに向かっていくのか。まずこの福島含め会津にいて大丈夫なものなのか、すぐに私たちも避難すべきなのかどうなのか。情報を集めながら考え悩んでいました。

考えた末に、福島への短期的な支援はできる人が多いので、中長期的に福島と共に頑張つていこうという人を探し始めました。福島と共に福島で働くということを思つてくれる企業、人はいるのかどうか、福島の人たちは不安に思つっていました。いるのであります。

ればそれを実感として感じたいと考えたんです。何社も手を挙げてくれました。結果的に難しいという結論に至つた企業も多いのですが、福島に拠点を構えて、復興のために福島のために動いてくれる企業は出てきました。震災以降、「何か力になれば」と言ってくれた人たちの思いは本当に本物で、ある意味一流の方たち、十分な力を持つている人たちが「福島のためになら力になろう」と言つてくれました。

ブランドでいえば、震災前は、地域の特徴を考えつづけた独自のブランドの数はそれほどなかつたんですが、震災後はそれをしなければもう売れないし、そういう商品を応援したいという人たちが増えました。被災地の中でひたむきに支援をしている人の姿などを見て、產品自体の価値よりも、そこに心を動かされたって人が多いんですよね。物を見る視点が、その先の物を作つている人の取り組みや想いに関心が移つていつたと思います。

将来のビジョン

会津では三つの恩を説くんですよ。一つは両親、もう一つは先生、三つ目が地域。やはり何だかんだ言つても、今の自分がある原点を忘れずに、家族のもとで、家族が喜ぶことを、そして今までお世話になつた先生たちにとつて喜んでくれることを、地域のためになることを、やることが結果的には一番後悔のない人生になるのかなと思っています。



ものづくり

復興
とは？

震災以前のこと

24歳の時にIT関係の会社を立ち上げました。私は宮城県山元町の出身ですが、そこから上京して大学に入り、在学中に会社を作つたんです。その会社を10数年経営してきた時に震災が起きました。

震災から現在

震災の日は休みで、東京都内の自宅にいました。もの凄く揺れてすぐにテレビをつけました。そうしたら自分が良く知っている町が津波に飲み込まれていく映像が映し出された。驚きました。古里は全壊したのかもしれないと思いました。電話は繋がらませんから、山元町にいる両親の安否すら分からず、とにかく不安でした。震災の翌日か翌々日に、車にありつけの援助物資を積んで山元町へ向かいました。幸い両親は無事でしたが、そこには変わり果てた古里の姿があり、衝撃を受けました。

山元町は人口のおよそ4%の人が亡くなってしまった。生きている自分にできることって何だろうと、自問自答しました。まずはできることからボランティア活動を始めました。一旦東京に戻り、経営者仲間やMBAをとるために通っていた大学の仲間と団体を立ち上げ、震災の翌月から毎月ボランティア活動に足を運びました。活動の中で、町の人たちから言われたのは「君たちはビジネスマンだ。泥かきはありがたいが、働く場所を作ってくれ」と。その言葉を聞いて、これは自分の使命だと感じましたね。これまで学んだことを古里の復興のために使わないでどうするんだ、という使命感も湧いてきました。ボランティア活動をしながら、震災前は町の経済を支えていたイチゴの再生に全エネルギーを傾注しました。こ



岩佐大輝さん

岩佐さんは、故郷の山元町をなんとかしたいという思いから、震災後すぐにNPOとしての活動を開始。被災してほんどのが失われたイチゴの生産現場をなんとか復活させたいと奔走している。学生時代に起業してIT企業を始めた岩佐さんに農業の今と未来を語っていただく。

中高校生へのメッセージ

食に携わるビジネスというのは、人々の最も重要な生命の基盤を担う礎になるものです。是非、皆さんに農業や食のビジネスにチャレンジしていただきたい。そういう取り組みを私は全力で応援したいと思います。

将来のビジョン

まずは山元町のイチゴ作りを今以上に安定させたい。次に、新しく農業をやろうとしている新規就農者を支援するビジネスをやっていきたい。それと、今インドでもイチゴを生産していますが、他の国々でも需要があるところへ行ってイチゴ作りを始めたい。こんなことに力を入れていきたいと思っています。

カキ、ホタテの養殖をしながら、森と海との繋がりを「伝えるための環境教育プログラムを組んで、子どもたちとキャンプをしたり、学校の野外活動のお手伝いをしたりという活動をしていました。

震災から現在

震災が起きた日は海辺で養殖の仕事をしていました。とても大きく揺れて、海を見たら水が既に動き出しているのが分ったんです。船を守ろうと沖に向かいましたが、第一波に巻き込まれて舵が壊れ、漂うだけになってしまったので、海に飛び込んで何とか陸地に泳ぎ着きました。

そこは気仙沼の大島だったんですが、四日間ほどは火災をくい止めるために山肌を削ったり、貯水タンクの水を山まで運んだり、島の人と一緒に活動しました。自衛隊のヘリで内地まで運んでいただけで家に向かいましたが、津波に流されてすべでなくなっていました。幸い実家が流れずに済んだので、冷凍庫にあるものを少しずつ食べていました。

何日かして、NGOやNPO、民間の支援団体の方たちが物資の配布に来られたので、「○○に住んでいるおばあさんは食糧が不足している」などの地元の情報を提供して助けてもらっていました。支援団体の方たちと地元の人たちを繋ぐ役割ですね。震災

森と海の 繋がりを伝える

NPO法人 森は海の恋人副理事長
畠山 信さん
【宮城県】



畠山 信さん

畠山さんは、海と森の繋がりにいち早く着目し植林活動などの環境保全活動や、環境教育を実践しているNPO法人森は海の恋人副理事長。被災者と支援者のマッチングから海の調査活動、防潮堤問題への取り組み等、精力的に活動している。2014年4月には舞根森里海研究所を設立。ご自身も牡蠣・ホタテ生産者である畠山さんは自然との共生や繋がりについて語っていただきました。

中高校生へのメッセージ

まずは、色々な問題が世の中にあると知ること。世の中には色々なデータが存在していますが、それらが真実かどうかを見極めないといけない。そのためには自分で調べるということが最も重要になります。

将来のビジョン

森は海の恋人の活動を海外へ広げていきたいですね。環境教育プログラムを海外の方にこの場所で提供するのもいいですし、海外でそういう理念を広げる活動が重要なのかな、と思っています。

会津の伝統野菜で 繋がりを広める

くらし

伝統文化を
生かす・守る

長谷川 純一さん



うちは分家なんですが農家の5代目として農業をやつていました。冬の間はスキー場の仕事もしていて、地震のあつた時も磐梯山の山小屋にいました。

震災から現在

かなりの揺れがあり、まずは安全確保のパトロールをし、家族の無事を電話で確認し、消防団に入っているので、対策本部へと向かいました。津波の映像を見て、ひょっとしたら原発が危ないんじゃないかと思つていた矢先、3号機の爆発があり、本当にショックでしたね。

ハウスの葉物を避難所に届けて、喜んでもらつていたんですが、他所の検査で放射能が検出されて福島県全域の野菜がストップしてしまい、廃棄になつてしましました。そんな矢先、ある取材で清水君と出会つたんです。

元々、会津伝統野菜を守る会という活動をしていまして、地元の農業高校へ教えにも行つっていました。震災では辛い事もありましたが、清水君には「会津御種人蔥を育てたい」という熱意と、這い上がるうとする力強さがありました。今では伝統野菜を一緒になつて育てています。

将来のビジョン

行政も何とか伝統野菜を守り育てようとしている。実際に育てる農家は大変な苦労をしなければいけない。でも、個々の農家、地域、集落が繋がることで力が出てくる。農産物が繋がることでいろんな人の繋がりも広がる。そんな思いで伝統野菜を作つていきたいですね。



人と種をつなぐ会津伝統野菜
長谷川 純一さん
【福島県】
清水 琢さん（左）



長谷川純一さん 清水琢さん

大量生産大量消費の時代の流れで、日本各地の伝統野菜が姿を消しつつある中、長谷川さんと清水さんは震災を機に会津の伝統野菜の大切さを痛感。「人と種をつなぐ会津伝統野菜」を立ち上げた。伝統野菜とその記憶を大切にし、未来を紡ぐとは何か。2人に語つていただく。

農業には未来があります。若いうちに是非、食べ物を育ててみると喜びを感じてください。作物は手を掛けた分だけ応えてくれます。

清水さんから 中高生へのメッセージ

食べるという事は人と繋がるということ。時には作っている人に会いに行ってください。そして、ぜひ体で感じろ経験をしてください。

地震が起きた時、お茶の焙煎で火を使っていたので、大急ぎで火を止めて従業員の安否を確認しました。幸い全員無事でした。震災のあつた2011年、実は我が社は過去最高の売り上げを予定していました。ところが放射能の影響で売り上げは激減してしまいました。会津御種人蔥という江戸時代から続く会津の伝統ある特産品があるのですが、2012年に、作る人が減ったために会津御種人蔥の専門農協が解散するという話が持ち上がり、その中で、加工施設を継ぎませんかという話をいただきました。作る人を増やそうと思い、ベテランの農家を回つて話を聞いたりしていたのですが、これは自分で作るしかないと言ふ念が起きました。2013年に農業を始めました。

伝統野菜を守り育てている長谷川さんと出会い、人と種を繋ぐという思いに共感を覚え、会津御種人蔥を会津の人に愛してもらおう、そして国内の人にももっと食べてもらおうという思いを強く持つようになりました。伝統野菜を守り育てている長谷川さんと一緒に出来ること、人と種を繋ぐという想いが元気になるよう、頑張っていきたいです。

将来のビジョン

会津を漢方の里にしたいと思います。薬草を探つて来ててくれる人、乾燥や選別などに携わってくれる人、そして使つてくれる人。すべての人

魚と人を 繋ぎ直す

有限会社 三陸とれたて市場 代表取締役

八木 健一郎さん

【岩手県】

くらし

食を
守る



震災以前のこと

生まれも育ちも静岡。大学2年の時、キャンパスが三陸町（現在の大船渡市三陸町）にあったので移り住みました。魚の現場に入つてみて凄さや旨さなど驚くことがたくさんあつて、消費者の感覚としてマーケットと繋がるんじゃないかと思つてホームページを作るアルバイトをして、卒業後に「三陸とれたて市場」を立ち上げました。船にライブカメラをつけて、浜の物語のようなことをインターネットで発信し、魚と人を繋ぎ直すようなことをやっていました。

震災から現在

震災の日はスタッフ全員が社内で作業をしていました。凄く大きな揺れがあつて、津波が来るんじゃないかと、皆で海拔300メートルほどの山のてっぺんまで坂道を登りました。頂上まで行ったものの、しばらく経つて町の状況が全く分からなかつたら下りたら、町がまるきり消えています。もの凄いことが起つたのは認識出来るけれど、何が起つたのか理解出来ない状況でした。30分ほど前までいた会社も町も、がれきの山になつていたんです。

避難所で一晩明かして翌日、作業をしていた浜の方まで行きました。がれきが溢れていて、一体どこから片づければいいんだと途方に暮れましたね。自分たちで片付けを始め、人的な被害の規模が見えてきたのが地震から3日目ぐらいでした。

それから少し経つて漁業者の方に被害の状況を確認しました。

何が残っているのか、がれきがどうなつているのか、できる漁業つ

てあるのかつて。どうすれば最短で立ち上がりつていけるのか。避

難所の前にテントが張つてあつたんですけど、そこで焚火をしな

がら皆で意見を交わして励まし合つていました。

そんな中、4月11日に岩手県が復興宣言をするという情報が入



八木 健一郎さん

大学時代に初めて三陸地域にやつてきた八木さんは、漁師

さんたちと新たな試みを次々と実施しながら魚を売つきました。まだBtoCなどは空想もつかない頃に、船上でライブカメラを使って販売したり、京王プラザホテルと組んで食材を開発したりしてきた。震災後は同じレベルを數々直すのではなく、新たにレールを敷き直すことが復興だという八木さんに、新たな日本の水産業について語つていただく。

中高校生へのメッセージ

等身大っていうのか、肩肘を張らずに裸の自分でお互いがぶつかり合える時こそ、素晴らしい物が出来上がつてきます。無垢であることの大切さですね。ミサンガがまさにそうでした。子どもの時に持っている無垢な感性を消さないで自分を信じてください。

将来のビジョン

自分たちが三陸の町の中で作つてきた漁業者との関係を、少し離れた場所の漁業者たちとも同じ構造で作つてみて、その漁業者たちが得意とするものがもつと消費の現場を喜ばせるようなツールにできないかと考えています。少しずつですが、構造を広げていきたいですね。

～震災以前のこと

東京の大学を卒業後、故郷の青森に戻り、青森銀行に入行しました。支店長や東京国際部参与を経て、金融派生商品を学ぶため欧米に2年間滞在する機会を得たのですが、そこで「稼げる農業」に出会いました。50歳で退行し、民間企業を経て61歳の時に農業で起業することを決意。若者が夢を描ける農業を目指し、生産から販売までをトータルに行う株式会社グランパを立ち上げ、植物工場「グランパドーム」を開発しました。

くらし

食を守る

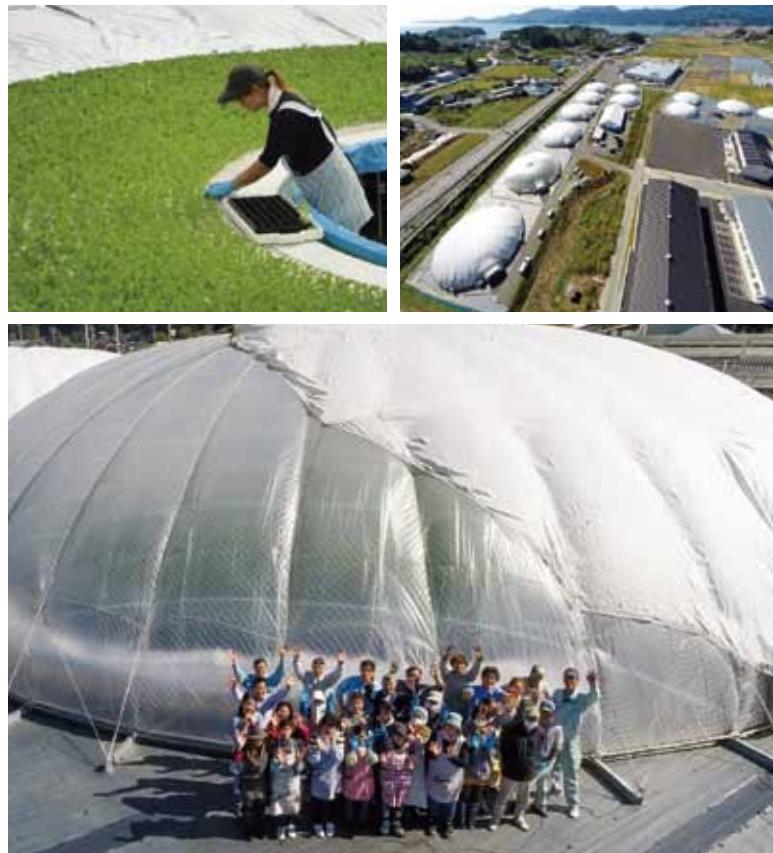
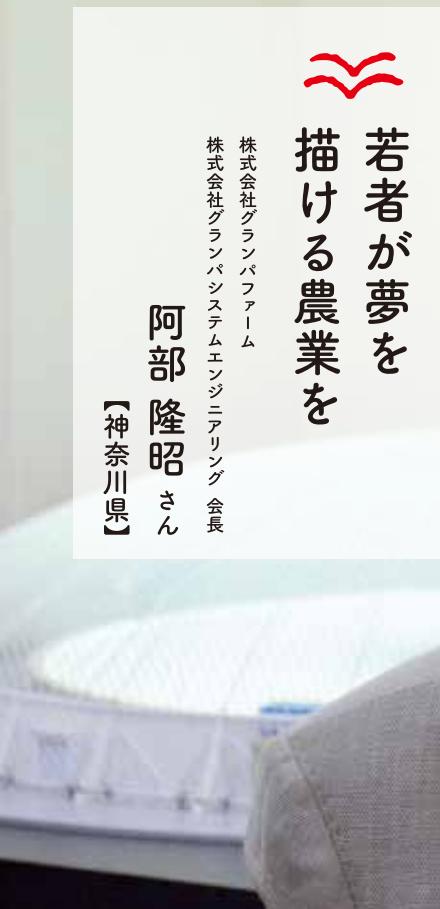
若者が夢を 描ける農業を

株式会社グランパファーム

株式会社グランパシステムエンジニアリング 会長

阿部 隆昭 さん

【神奈川県】



阿部 隆昭 さん

阿部さんは日本の農業の未来を見据え、長年勤めた銀行を退職。工

アードーム式植物工場を開発。グランパファーム陸前高田を立ち上げ、被災地支援として産業の振興、雇用の創出に取り組んでいる。今は軌道に乗っているグランパファームだが、立ち上げにはどのような苦労があったのか、未来を見据えた新しい農業とは、を語っていただく。

中高校生へのメッセージ

自分をしっかりと持って、何と言わても頑固に本当に自分の好きな事ややりたい事、欲しいものを追求してください。他の人にとって地味でも、自分にとって大切な事を大事にしてください。

ドーム内では、データ管理された毎日の履歴によって、最適な栽培環境を導いています。生産した野菜は地元のスーパーや生協に出荷していますが、どの野菜も栽培履歴の管理をしていますから、お客様が口にした野菜が、いつどこで、誰が作業をしたか、が分かるよう記録されており、安心して食べていただけます。

今、グランパドームは陸前高田を含め、国内10農場に施設があります。近く、アブダビにも農場が完成する予定です。実は、私たちの取り組みは教科書でも取り上げていただいています。少しずつではありますが、子どもたちの農業に対する考え方が変わる、周りの環境が整ってきていると感じています。

～将来のビジョン

近年、私たちの暮らしは温暖化、集中豪雨、猛暑、火山の噴火など、異常気象に悩まされています。特に従来の農業は自然に大きく左右され、自然の脅威と常に背中合わせ。旧態依然とした農業では安定生産はできません。その上、日本の農業就業人口の60%以上は65歳以上で、高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加などという大きな課題に直面しています。

このような閉塞した日本の農業を変えるためにも、グランパドームを中心とした地域展開を推進し、これまでの農業のイメージを変え、若者が将来の夢を描けるものにしたいと考えています。植物工場の技術や野菜を国内だけでなく、世界各地に積極的に輸出し、農業技術を学びたい外国人留学生の受け皿としての役目も果たしたいと考えています。



世なおしは 食なおし

NPO法人東北開墾 代表理事

高橋 博之さん

【岩手県】

くらし

食を守る



中高校生へのメッセージ

思い通りにならないことがあっても、受け入れよう。僕自身、新聞記者になりたいと思って文章を書いたことや、議員の体験など、やってきたことに無駄なことなどひとつもありません。人生には限りがあります。今を一生懸命生きることはめず、未来の自分に伝わります。

岩手県議会議員を務めていた高橋博之さんは、震災直後被災地を訪れる中でNPO法人東北開墾の発足を決意した。「食」をテーマに活動することを決め、「東北食べる通信」という地域の食べ物を付録とした雑誌を創刊した。生産者の哲学や背景を取り上げた雑誌とともに、届けられる新鮮な食材。東北食べる通信の先進的な考え方や、地域社会が抱える課題とそこから見える可能性を語つていただきました。

高橋 博之さん

岩手県議会議員を務めていた高橋博之さんは、震災直後被災地を訪れる中でNPO法人東北開墾の発足を決意した。「食」をテーマに活動することを決め、「東北食べる通信」という地域の食べ物を付録とした雑誌を創刊した。生産者の哲学や背景を取り上げた雑誌とともに、届けられる新鮮な食材。東北食べる通信の先進的な考え方や、地域社会が抱える課題とそこから見える可能性を語つていただきました。

震災以前のこと

花巻で生まれ育ち、大学進学で上京しました。当時は新聞記者を目指していて、直接で喋れるエピソードがないかと考えていたときに、大学の先輩で代議士をやっている方がいて、事務所を手伝わなかいかと声をかけていただいたんです。「これは面接受けする」と考え、手伝いを始めました。結局、新聞社はすべて落ちたのですが、このことが政治に興味を持つきっかけになりました。29歳のときには郷里に帰って議員を目指しました。帰った次の日には街頭に立ち、演説を始めました。ゼロからのスタートです。31歳のときに岩手県議会議員の補欠選挙で当選し、2期目の途中で震災が起きました。

震災から現在

地震が起きたとき、私が委員会室で議案の審議をしていました。審議は中断。テレビの画面を通して目に飛び込んできたのは、人がつくった町が自然の力で押し流される光景でした。言葉がありませんでした。数日後、食糧などの支援物資を集めて被災した沿岸部に行き、その日から大槌町を拠点に支援活動を始めました。内陸部で育った私はそこで、漁師から初めて直接話を聞き、漁業が直面している問題を深く知ることになりました。

震災の年の7月、岩手県知事選に立候補をすることを決意し、県議を辞職。とにかく現場で被災者一人ひとりと話をしたいと、徒歩で遊説を続けました。結果は落選。完敗でした。それでも、4年後の次の選挙を見据え、また街頭演説を始めました。しかし、言ってしまえば自分の顔と名を売るために口ばかりの選挙活動を見直してしまいました。

している自分に急に嫌気がさし、これまで口で言つてきたことを、実際に自分の手や足を動かしてやつてみたい、と政界引退を決意しました。農家や漁師の近くで仕事をし、形にしたいと決意し、石巻の牡鹿半島にある牡蠣養殖の手伝いを始めました。そこで知つたのはあまりにも安い牡蠣の出荷価格でした。

牡蠣を適正な価格で販売するために、漁業の価値を消費者に伝える取り組みが必要だと考えました。そして誕生したのが食材を特集した記事と、その食材を付録として届ける「東北食べる通信」です。構想からわずか3ヵ月後の2013年7月、創刊しました。この取り組みは全国展開し、今では34の食べる通信があり、9000人以上の読者がいます。

将来のビジョン

私は、姉が障害を抱えていたこともあって、子どものころから効率という物差しだけでは測れない豊かさがあるという思いを常に持っていました。震災でその思いが一層強くなり、人間の共通点であり、命の源である「食」を改めて見直すきっかけになりました。そのことが食べる通信誕生の原動力にもなりました。

実は、食べる通信は1誌の購読者は1500人という上限を設けています。目指すところは大量生産や効率主義ではなく、顔が見える関係だからです。1誌ごとの上限を設ける代わりに、全国へさらに展開したいと考えています。まずは100の食べる通信を刊行すること。そして、日本の食の流通の15%は生産者の顔が見えるようにします。

ワークシート

パッショング / 情熱

ビジョン / 世界観

ミッション / 使命

スキル / どんな能力が必要でしょうか？

スキーム / どんな仲間がいればできるのでしょうか？

東日本大震災復興支援に関する 2020年までの取組方針

三井物産は、東日本大震災の発生から丸5年を迎えるにあたり、復興支援に関する2020年までの取組方針を決定しました。

地域の活性化に貢献し継続性をもって地域に定着する事業活動、ならびに復興を担う次世代の人材育成を中心とする環境・社会貢献活動を通じて、持続可能な支援を引き続き推進し、被災地域の着実な復興と創生に貢献していきます。

案件名	活動内容
気仙沼鹿折加工協同組合	水産加工業の再興支援 販路の再構築や新商売開拓、労働力の確保など、組合運営のための総合的な支援を行います。
仙台うみの杜水族館	地域経済の活性化 「海と人、水と人との、新しいつながりを「うみだす」水族館」をコンセプトに、復興を象徴する新たな観光資源として貢献します。
TOMODACHI & Mitsui & Co. リーダーシッププログラム	次世代リーダー人材育成 日米の若手社会人代表団が日米関係とリーダーシップを学ぶ他、被災県訪問による新たな交流を創出します。
BS12チャンネル「未来への教科書」 出演者による出前授業	キャリア教育 復興・創生を担う子どもたちが「生きる力を育む」ための授業を行います。
宮城県女川町における 英会話プロジェクト	グローバル人材育成 中学生を対象とするスカイプ英会話学習の他、三井物産社員が自らの海外体験を語る特別授業を実施します。
「三井物産環境基金」 研究・活動助成	地球環境問題解決への貢献 大震災により発生した新たな環境問題の改善・解決に取組むNPOや大学への助成を通じて、持続可能な社会、コミュニティの再生を支援します。



仙台うみの杜水族館



BS12チャンネル「未来への教科書」出演者による出前授業

三井物産ウェブサイト「東日本大震災への対応」
<http://www.mitsui.com/jp/ja/csr/contribution/disaster-relief/>



気付いた事をメモしましょう！

気付いた事をメモしましょう！



360°
business innovation.

三井物産。それは、人。

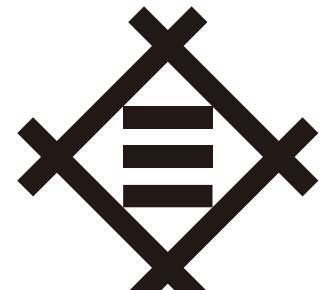
人の意志。人の挑戦。人の創造。

私たちは、一人ひとりが世界に新たな価値を生みだします。

世界中の情報を、発想を、技術を、資源を、国をつなぎ、あらゆるビジネスを革新します。

これからの時代に、新しい豊かさを生み、

大切な地球とそこに住む人びとの夢あふれる未来をつくっていきます。



MITSUI & CO.

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

世界をつなぎ、人を育て、地球を守る。 夢あふれる未来作りのために。

三井物産は、「国際交流」「教育」「環境」の3つのテーマを中心に、世界中でさまざまな社会貢献活動を進めています。大切な地球と、そこに住む人びとのこれからのために、私たちができるることを、ひとつひとつ。



**サンクトペテルブルク
国立大学冠講座**

ロシアにおいて、日本への理解と相互交流を深める取り組みを行っています。



北京大学三井創新論壇

日中経済および文化交流の促進を目的とした冠講座を開催しています。



米国三井物産財団の活動

教育や地域福祉などの幅広い分野において、アメリカ社会に貢献する活動を進めています。



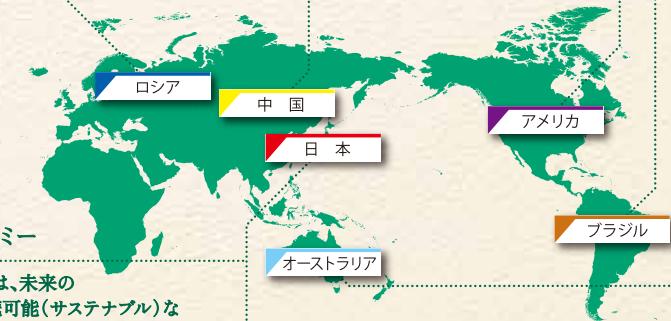
ブラジル三井物産基金

サンパウロ大学での冠講座開催や、帰国した日系人子弟の現地学校への適応支援などを行っています。



三井物産「サス学」アカデミー

「サス(サステナビリティ)学」とは、未来の担い手である子どもたちが、持続可能(サステナブル)な未来を創る力を育むための学びです。「サス学」を通じ、子どもたちの「未来を創る力」を応援しています。



**「三井教育基金」
研修プログラム**

オーストラリアの大学生を対象にした日本での研修プログラムを実施しています。



三井物産環境基金

未来につながる社会を目指して、環境貢献活動を行うNPO/NGOや環境分野の研究を行う大学等の研究者に対し震災復興支援を含めた幅広い助成を行っています。



森のきょうしつ

「三井物産の森」での森林体験や、学校への出前授業に加え、ウェブサイトでも森の役割と木材産業を通じた環境保全を伝えています。



在日ブラジル人支援活動

在日ブラジル人学校児童向け奨学金などの子弟向け教育活動や、NPO団体への支援などを行っています。